

シベリアでの三年

和歌山県 中谷秀次

昭和十九年二月十五日、入隊するべく大阪府の金岡の第二十五部隊に入り、直ちに博多へ、そして満州へ。東安省平陽の部隊で訓練を受けていたが、戦局が次第に緊迫度を増してきた。

八月九日にソ連軍の侵攻の報が入り、我が部隊長は牡丹江まで撤退を命じ、侵攻の及ばないうちにと牡丹江に集結したのである。牡丹江では橋を爆破するなどしてソ連軍の侵入を阻止すべく実行に努めたが、間もなく牡丹江市内にソ連軍爆撃機が飛来して大型爆弾を落として十メートル余りの大きな穴ができていたし、せっかく橋を爆破して侵入できないように防衛していたのにソ連軍戦車は平気で川を渡ってきた。また、敵の歩兵隊も続々と攻めてきて、我が軍も三日間は銃の撃ち合いで交戦したが、四日目になると敵は少しも撃つ

てこなくなった。不思議に思ったものだが、翌十六日になって知ったことは、日本国は無条件降伏をしたから直ちに武装解除に応ずべしとの命令が司令部から届いた。

当時私は騎兵隊に属していたので、各所に伝達に走った。ソ連側の将校が来て武装解除の確認をしていた。気抜けがすると同時にこれで命を失うこともなく内地に帰れると安堵した。それからは横道河子に早く帰らねばと皆帰国することを考えていた。

横道河子にて貨車に詰められ、南下すると思いきや北へと進むではないか、綏芬河に至り下車して徒歩で一週間ほど続いた。その間歩く途中で「アメーバ」赤痢患者が出て、多くの者が下痢のため用足しすること頻繁であったが、どうにか死亡する者もいなくて安堵した次第でした。一千人になると一列車を仕立ててシベリアの奥地へ送られるのです。昼は列車は走り夜は止まって動かない。「タイセット」に着くまで半月近くもかかった。駅の近くに収容所があった。

付近は広々とした平地で、当座は「いも掘り」など

で時を過ごした。収容所で生活するようになって感ぜられたことは、疑い深いソ連人は、私たちについて同じ県出身者を一緒にすることを極端に嫌うし、同部隊にいた者同士も別にするように心得ての編成であったように推察されたこともあった。最初の冬は極端に少ない食糧のためと寒さのためというか六十人中六人ほどは死亡していった。軍医が来て尻の皮を引っ張り、元に戻ればよし、戻らねば休養が許可された。私は元に戻ったのか休養させてはくれなかった。各班の抑留者メンバーが度々変えられるので、作業内容も次々と変えられるのです。「レンガ造り」や「大工仕事」「道路工事」などである。

「イルクーツク」の収容所に移動したときは、川船に「食糧」や「テント」「寝具」「日用品」などを積んで上流に行ける所まで進み、動けなくなつてそこにテントを張り、原木の伐採に苦勞したこともあった。そのときは夏のこともあり、森の中の蚊の襲撃には悩まされたものです。

山の中には「きのこ」が沢山生えていた。日本の松

茸のような良い匂いはしないが結構美味しかった。このようなときに特に気を付けなければならぬことは「毒きのこ」の見分け方で、経験のない素人には大変なことになり、あるときだれかが「毒きのこ」に当たつたのか夕食の最中に一人が突然に苦しみ出して大変心配したことがあった。幸いに他の者は何事もなかった。山火事のあった傍らを通つたこともあった。聞けば二年間も燃え続けているという。

三度目の寒い冬を送り、昭和二十三年の春に帰る順番がきたのかグモイ列車に乗ることができた。

「ナホトカ」に着き、もう帰れると思いきや岸壁のブロック積みの工事をさせられることになった。貨車から下した「ブロック」を「トロッコ」に乗せ岸壁まで押して行き水際に積み上げるのであるが、仕事はソ連人よりも能率は上々であるので、奴らはすこぶる喜んで、市民権を取るから永住してくれと勧められて困つたが、勿論残る気持ちなど毛頭ない。丁重にお断りして舞鶴に、時に昭和二十三年五月十四日の入港であった。そして我が懐かしい故郷に帰ってきました。